
病院病理部

教授(部長)

深山正久*

准教授

福嶋敬宜*(副部長)

講師

宇於崎宏, 太田聡*, 高澤豊*

病院講師(病理部)

柴原純二, 鹿島健司(英国留学)

助教

坂谷貴司, 牛久哲男, 森川鉄平(病理部), 石川俊平*, 日野るみ*, 菊地良直*, 仲矢丈雄*(がんプロフェッショナル養成講座特任助教)

医員

森田茂樹, 住友賢哉

ホームページ <http://pathol.umin.ac.jp/>

沿革と組織の概要

病院病理部と病因病理学専攻人体病理学・病理診断学分野(*)は、一つのユニットとして機能し、東大病院の病理診断業務(剖検・病理診断)と、人体病理の教育、研究に当たっている。平成20年度から「病理診断科」という名称が診療標榜科名として法令上認められた。また、診療報酬改定で第3部「検体検査」から独立し、第13部「病理診断」が創設された。いずれも病理診断の重要性に対する社会的認知の向上を示すものとして、人体病理学の領域で働く者にとって非常に喜ばしい改正、改定であった。

平成20年度の病理部固有のスタッフ構成は、

講師1名、病院講師1名、助教3名、医員2名であった。

診療(病理診断・剖検)

平成20年度は、生検13,583件、細胞診16,535件、迅速診断664件、迅速細胞診537件、剖検104件(剖検率23%)であった。

「病理診断科」が標榜科名として認められたことを受けて、病理診断の内容を患者に直接説明する「病理診断なっとく外来」の開設を考えている。実際の患者の希望を探ることを目的に、現在、乳癌患者の手術前の説明に、要望に応じて坂谷助教が同席し、病理診断に対する説明を行っている。

例年通り剖検症例に関する検討会(病院CPC)を、病院において毎月1回行い、毎回2症例について検討している。呼吸器外科、脳外科、肝臓・胆膵、泌尿器、婦人科、乳腺、整形外科の手術症例、ならびに肝臓、腎臓、皮膚生検について、臨床各科と定期的にカンファランスを行っている。

我々の業務上の目標は、正確な診断を可能な限り早く臨床に提供することであり、最近、開発された迅速組織標本作製装置を用い、one-day pathologyを実現するべく、検討を重ねている。

ヴァーチャルスライド・スキャナーを導入し、院外からの標本をデジタル情報として保存しているが、今後、生検標本の病理画像を院内に広く提供することを目指している。この件について、宇崎講師が中心となって取り組んでいる。

前年度より継続して、厚生労働省「診療行為に関連した死亡の調査分析モデル事業」に協力し、「診療関連死」解剖評価を行った。

教育

M2を対象に系統病理学講義、実習を対して行っている。ベッドサイドラーニング(BSL)はM4を対象に行っている。クリニカル・クラークシップでは、6名の学生を受け入れた。また、同時期に京都大学医学部イレクティブ実習として1名の学生を2週間受け入れた。

卒後臨床研修制度で各研修医に義務付けられているCPCレポートの指導を行った。また、研修二年目のプログラムとして、平成20年度には、5名の研修医を病理部に受け入れた。

研究

平成20年度から2年間の予定で「診療関連死の解剖調査を補助する手法(死後画像)の有用性に関する研究」(厚生労働省科学研究費)を開始した。成果については研究班ホームページ上で公開している(<http://humanp.umin.jp/>)。東大病院における実施研究(剖検症例の死後画像と剖検結果との対比研究)に関しては、平成20年度はモバイルCT車を利用して4週間の実施となったが、臨床各科の協力で円滑に検討を行うことができた。平成21年度は、診療で不要と

なったCT装置を病院オートプシー室の隣室に移設し、オートプシー補助CT装置として用いることにより、多数例で検討を行う予定である。この件については、高澤講師が中心となり精力的に取り組んでいる。

東京大学先端科学技術研究所ゲノムサイエンス部門と共同で、癌特異抗体の開発を行っている。種々のヒト癌のDNAアレイデータをもとに、候補遺伝子産物に対するモノクローナル抗体を作製している。スクリーニングの過程を促進するため、腫瘍、非腫瘍組織の組織アレイを構築している。この件については太田講師、柴原病院講師を中心に取り組んでいる。

出版物等

人体病理学・病理診断学分野の該当項参照。